日韓歴史家会議の経験から

板垣　雄三（東京大学名誉教授）

皆さまこんにちは、板垣です。長野県から参りました。この集会での発言は早くから求められてはいたのですが、遠方にいるため打ち合わせが不十分でプログラムもよく承知しておらず、第１部の他の方々のようにレジュメ資料の用意をせず、標題とは異なる話をすることについて、お許しを願わねばなりません。

それでも、掲げられてしまった標題について、少しは触れなければならないでしょう。日韓歴史家会議は、1998 年の日韓パートナーシップ（来日した金大中大統領と小渕首相の首脳会談の行動計画確認）の産物の一つです。歴史認識に関して 21 世紀開幕と共に動き出した歴史共同研究の複数トラックの内、多くが両論併記の不毛の報告書を残して消滅したのち、現在も続いている唯一のものです。今年は 11 月 8〜10 日ソウルで第 19 回会議が開催されます。発足時、韓国側の積極的提案もあり、日韓関係だけでなく世界史の諸問題を論じ合う／しかも国を背負う向かい合いでなく研究者個人として混じり合って座り討議する／という精神が、協同の公共空間を創りだし、それを活性化させてきました。私は、発足時から 10 年程は運営に関与しましたが、今は一参加者に過ぎず、本日これから私が語ることは板垣個人の意見であって、日韓歴史家会議とは無関係の事柄とご理解下さい。

1

さて、ここで私が言いたいのは、現在の日韓関係の行き詰まりを考える場合、視野を世界大に拡げることの必要性です。第１点、世界史の現在とは欧米中心の国際秩序の終局であること。日本帝国が潰れ英仏覇権が退場の後ソ連解体に続く斜陽の米国を観てきた老人は三世・四世を生きた気分のはず。世界中あらゆる国が政治の破綻に直面していますが、最大の問題は、むしろ非欧米の国で欧米中心主義しがみつきが顕著なことです。第２点、世界は 2011 年から胎動著しい新市民革命（私はこれを 17〜20 世紀の市民革命に対してムワーティン革命と呼んでいます［ムワーティンはアラビア語で〈市民〉］）の新時代を迎えていること。アラブ市民決起は日本の原発事故と重なり世界中に飛び火、99％のオキュパイ運動を呼び覚まし、14 年台湾ひまわり革命・香港雨傘革命（現在に続く）、16〜17 年韓国のキャンドル革命とその後の展開、そして現在スーダンの市民革命へと連なります。東アジアでこの新時代への動きが集中的に起き始めていることが注目されるのです。

第１と第２の現象が、厳しく衝突をきたしています。その中で、日韓関係のギクシャクが、ホルムズ海峡の軍事的緊張をめぐる中東の戦乱の新たな危機のもとで激化したこと／米中関係の変転のもとで朝鮮半島の統一への過程に日本がどのように関与できるのかが問われるところで生じていること／が、大事なポイントではないでしょうか。

2

ところが日本社会は、世界全体の動向には疎く、大国依存で内向き思考の刷り込みから抜け出せないままです。第２次世界大戦後 75 年も経とうとするのに、20 世紀半ばまでの戦争の後始末がつかぬままの国は、日本だけだという自覚がない。始末のつけ方の正否・適否は多様だが、これ程に弛緩した現状充足感と勝手な他者切捨ての横行は独特です。

国連憲章53条・107条の「侵略政策の再現に備え防止する」敵国条項が、時代の変化の認識から削除作業の開始を定めた1995年総会決議にかかわらず、今なお放置された現状でその存在価値が見なおされないとは限りません。憲法改正で「ナチの手口に学んでは」とか／北方領土問題で「戦争しないとどうしようもなくないですか」とか／口走る政治家がいるという国際ニュースは、浮遊し孤立する日本への世界の厳しい眼を予想させます。

戦後処理に関して対中国と対韓国の間の差違には、日本社会の伝統が反映しています。本朝（日本）・唐（中国）・天竺（印度）の三国意識におけるカラ（唐・漢）は韓を包摂するものでしたが、「むくりこくり鬼が来る」は子どもへの脅し言葉になるし、1894年日清戦争の開戦詔勅では朝鮮は日本の手下・領分という気分が籠められました。問題解決済みの根拠だとする1965年日韓基本条約では、日本の植民地主義の歴史的責任を認めるか否かについて、双方の間の根本的対立が未解決だったことが一方的に無視されるのです。

3

日本国家の道義性が疑われているこのとき、私は小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』[講談社学術文庫]を読むことを勧めたい。私たちが向き合う韓国人は朱子学に基づく道徳志向の人々で、体内に〈理気のスイッチ〉を持つ、と小倉は言います。気の空間ではケンチャンタ（問題ない、大丈夫）と言う人々が、理の空間ではタジダ（詰問し追及する）となる。日本では言葉は戦いを回避する道具で戦う道具は刀だが、韓国では刀は戦いを回避する道具でマル（言葉）こそ戦う道具である、が小倉の観察です。

徹底したタジダ局面が開いてしまったことについて、最近、日本政府がとった挑発的な措置や姿勢が深く関係していることは否定できず、また、それと連動して日本のマスコミやサイバー空間で異常な憎悪の空気が煽られたことも大きな作用因となりました。それらへの反省と是正が必要です。しかし今は、小倉が言う理の空間で、対等の理詰め対話として必要な反省と対論とをしっかりと交わすべきです。人間同士の哲学対話とすべきです。国際人道法も大きく変わってきています。相手がこちらの主張する法や約束を守る行動をとらない限り、話し合いは成り立たない、と突っ張るのでは、理気が合体する人間対話とはならないでしょう。

苦々しく不穏な衝突が、なぜか「令和」改元後に尖鋭化したので、私の心に突き刺さることがあります。令とは命令・掟。冷たい囹や上から零地点にポタポタ零る零落を連想させる字で、確かに清らか・麗しいという意味もあるが令夫人・令嬢と上目遣い諂って誉める巧言令色の感が付きまとい、漢文では使役の「××せしむ」と読んだ。日本の言い分を聴けという今回の日韓対立は、漢字文化圏で力ずくの平和＝「令和」の印象を与えかねません。世にその提案者と言われる人は私の大学入学時の親しい同級生なので、こんな話はしたくないのですが、その決定過程で脇の誰かの邪気が潜り込んだとしか思えません。こんな元号から解放されるとき、日本の倫理性は世界で信頼を得られるのではないか。